

編集後記

◆ 昭和天皇の誕生日であった4月29日を「緑の日」と呼び換え、「憲法記念日」と「子供の日」に挟まれた5月4日を意味不明の「国民の休日」として祝日に加えて、「ゴールデンウィーク」は初夏の行楽期間としてすっかり定着しています。例年のことながら、郷里へ、観光地へと繰り出す大勢の人の流れは、日本人の不思議なエネルギーを感じさせてくれます。中にはビールなどを傾けながら、交通機関の混雑や幹線道路の渋滞情報にヤニ下がっている不気味なご仁もあるようですが・・・

新暦の5月は「風かおる五月」などと呼ばれて爽やかな季節の代名詞ともなっています。事実、この時期は移動性の高気圧が次々と日本列島を通り抜け、乾いた晴天に恵まれる日が多いのです。今日では、「五月晴れ(さつきばれ)」とはこのような天候を指すようになっているようですが、本来の意味は違っています。言うまでもなく旧暦の5月は、おおむね今の6月に相当します。つまり、陰暦5月は梅雨の真っ盛りというわけで、「五月晴れ」とは梅雨の晴れ間を意味していました。長雨の谷間の貴重な晴天に、特別の思い入れがあったからに違いありません。

そうしてみると、俳句の歳時記なども含めて、五月(さつき、皐月、早月とも書く)を冠した言葉の多いことに気が付きます。曰く、五月雨(さつきあめ＝さみだれ)、五月女(さつきめ＝さおとめ)、五月川、五月波、五月山、五月閣等々。いずれも梅雨に特有

の風物を写したもので、この季節のウットウしさの反面、農耕のための恵みの時期としても、人々の心に大切に認識されていた表れなのではないでしょうか。

現今では、競馬の「皐月賞」や新しい環境に適応不全の「五月病」なども加わって、五月にまつわる言葉は益々賑わっていますが、五月蠅(うるさい)!と言われないうちに、ここで打ち止めとしておきましょう。

◆ 閑話休題。今月号の巻頭は「超高温変成岩」の話題です。この種の岩石が何処に分布するか、また、どのような形成の道筋を辿ったのか、表紙とグラビアの写真も含めて、分かりやすく解説されています。今年の1・3月号の「超高压変成岩」と同じく、地中からの手紙はこのような形でもたらされているのです。

以下、岩石の絶対年代測定に必要な標準試料の一つとしてのジルコンを求めての旅、カソードルミネッセンスによる最近の観察結果の紹介、ブライアン・メスン^{自伝}の5回目と続きます。

本号の掉尾は「インドネシア付加体紀行」の第2弾です。前回(昨年11月号)のジャワ島から、今回は舞台をスラウェシ島に移しての悪戦苦闘振りが語られています。洒落な文章の行間からは、筆者のインドネシアに寄せる熱い想いを読み取ることもできます。今後の展開にご期待ください。(吉田史郎)

地質ニュース編集委員会

委員長：吉田史郎
副委員長：谷田部信郎
委員：磯部一洋・関口春子・中島 隆・
安川香澄・飯笹幸吉

連絡先：地質調査総合センター 地質標本館
〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1
Tel. 0298-61-3754
Fax. 0298-61-3569

地質ニュース	第573号	2002年	5月号
	定価¥785(本体価格¥748) 千実費		
2002年5月1日	発行		
編集	産業技術総合研究所		
発行人	株式会社 実業公報社		
	代表者 林 光生		
発行所	株式会社 実業公報社		
	東京都千代田区九段北1の7の8 〒102-0073		
	Tel. (03)3265-0951(代表)		
	Fax. (03)3265-0952		
	振替口座 00110-6-32466		
	麹町局私書箱第21号		
印刷	株式会社 エアフォルク		

©2002 Geological Survey of Japan

●本誌は東京都の霞ヶ関政府刊行物サービスセンター
およびつくば市の友朋堂書店本店に常備してあります。
また、最寄りの書店でも注文できます。

地質ニュースに関するご意見は編集委員会へ